

「祝!! 同窓生が教授就任」

このたび、2期生の佐藤温先生が弘前大学大学院医学研究科腫瘍内科学講座の教授に就任されました。
我々同窓会会員にとっても大変喜ばしいニュースですので、今後の抱負について寄稿していただきました。

弘前の地で思い描いていること。

弘前大学大学院医学研究科腫瘍内科学講座 教授 佐藤 温（2期生）



師走の候、琉球大学医学部医学科同窓会の皆様には、益々ご健勝にてご活躍のこととお慶び申し上げます。平成24年7月16日、弘前大学大学院医学研究科腫瘍内科学講座に教授として就任いたしました。私は、東京生

まれで、中学高等学校は東京に通いました。琉球大学卒業、昭和大学大学院を修了、その後は消化器内科医そして臨床腫瘍内科医 (medical oncologist) として昭和大学および関連病院に従事してすでに24年が過ぎました。今回青森の地に赴任となり、知人らは、「日本縦断だな」とからかいますが、本当にその通りです。ひとの運命と言うものは予想がつかないものです。見知らぬ地ではありましたが、金城福則先生の母校と言え、何か運命があったのでしょうか。金城先生を知っておられる青森県内在住の先生方が実に多いことに驚かされます。ここ弘前は城下町であり、静かでそして歴史と伝統が息づくとてもきれいな街です。季節の移り変わりを感じ、美味しい食材を気楽に求め、そしてゆったりとした時間の中で暮らし始めました…が、すでに早くもまた多忙な日々にもどっております。こうして締切日の真夜中に挨拶文を書いているわけです。

沖縄の暮らしの中では、座右の銘である「なんくるないさあ（何とかなるさ）」と最も自分が大切にしている言葉である「ぬちどうたから（命が宝）」を学びました。医師になってからは、実臨床を通して、目指すべき腫瘍内科医像とは何かという命題をずっと突き付けられていたように思います。そ

の中での自ら引き出した答えのひとつが「いのちを育む」でありました。がん末期の患者さんらと「いのちを育む」のです。その援助が医療であり、私が職業人として行うべきものだと思っております。2004年12月発行の南風での自身の寄稿を読み返すと、その頃からなんら変わっていない自分を未熟者とも思いますし、一方でぶれていない自分に安堵したりもします。

当科は、「理想的ながん医療の実践を通して形成される人間性豊かな医療社会」を目指します。その理念は「理想的ながん医療社会の構築への貢献」であり、そのための手段として、良質ながん診療の展開、がん医療に携わる医療人の育成、がん研究の推進に邁進いたします。横断的に診療を実践していくため、各診療科連携のもと、協調的に集学的治療を実践管理しなければなりません。さらに包括的ながん医療の実践のためには、ほぼ全ての医療職が積極的にかつそれぞれが専門的に関与してもらう必要があります。その先に答えがあるものと確信しております。

これまでの医療人としての人生は本当に多くの方々に助けられ、そして育てて頂きました。感謝ばかりです。これから先、医療現場で「理想的ながん医療社会の構築」を青森で地域と社会と共に創造し、そしてこの地より発信してまいります。地方という点では沖縄と共通する問題があるかもしれませんが、是非、一緒に取り組んでいけたらと思います。何かの時は是非声をかけて下さい。挨拶文というよりは、思い付きの散文となってしまいました。未熟者ではありますが今後ともなお一層のご指導ご鞭撻のほど宜しくお願い申し上げます。